

アクアリウム・ダイアリー

2023年3月～5月

催し物

- 3月7日～ マイワシのトルネード 春ver.開始
- 1月31日～3月14日 季節展示
バレンタイン&ホワイトデー
「ちいさな愛叶いますように」
- 3月1日～3月26日 「家康の浴衣とカニ」
- 3月21日～4月9日 「春 海で出会う 小さな命」
- 4月29日～6月25日 「令和5年6月1日よりアメリカザリガニ、アカミミガメの規制が始まります。」



【水族館スクール“もっと知りたい!ダーウィン教室”】

- 3月12日 「大接近!ペルーガ飼育の舞台裏」 参加者4組11名
- 5月14日 「感じて納得!めざせシャチ博士」 参加者5組14名

生物の出来事

- 4月16日 アカウミガメCcW-19 今シーズン初産卵(62個)

来訪者

- | | | | |
|-------------|-----------------------------|-------------|--|
| 2月24日～3月23日 | 東北大学 塩見こずえ助教 | 4月28日～5月14日 | 名城大学 檜崎友子助教 |
| 2月28日～3月4日 | 名城大学 檜崎友子助教 | 5月9日 | 葛西臨海水族園 杉野隆副館長 他3名 |
| 3月2日 | 近畿大学 酒井麻衣講師、
日本大学 糸井史朗教授 | 5月11日 | 東海大学 吉田弥生助教、
京都大学 木村里子准教授、
名古屋大学 依田憲教授 |
| 3月4日 | 三重大学 宮崎多恵子准教授 | | 早稲田大学 石井裕之教授 |
| 3月8日 | 東海大学 吉田弥生助教 | 5月22日、29日 | |

講演・その他出来事

【講演など】

- | | | | |
|---------|--|-----------|---|
| 3月4日 | 共同研究講演会
(講師:三重大学宮崎多恵子准教授)
「採る・運ぶ・飼う・研究する
大学と水族館による共同研究のリアル
巨大アオリイカ「レッドモンスター」の飼育」 | 3月13日～14日 | JAA水族館研究会(出席:大島由貴) |
| 3月4日 | 葛西臨海水族園ホワイトデー特別企画
「ペンギンの性事情」(講演:材津陽介) | 5月21日 | 国際海洋生物獣医学会
オンライン発表(神尾高志) |
| 3月8日～9日 | 中部ブロック獣医師研究会(出席:小谷由佳子) | 5月22日～24日 | JAZA総会技術研究表彰受賞者講演(大島由貴)
「バンドウイルカ6例の出産前における
乳裂間隔と直腸温の変化」 |
| 3月12日 | 名古屋市動植物実態調査
専門家会合参加(中嶋清徳) | 5月25日 | ペンギン類の飼育および個体群管理勉強会
(WEB参加 材津陽介) |
| 3月12日 | 第4回動物園水族館大学シンポジウム
「動物園・水族館が挑む保全活動」
(発表:加古智哉、ポスター発表:神田幸司) | | |

【職場訪問・水族館レクチャー(オンライン含む)】

15件 854名

【職場体験】

1件 3名

編集後記

「さかなかな」にて編集後記が始まってから、ちょうど2年が経ちます。コロナ禍では、人との距離(ソーシャルディスタンス)を求められ、人とふれあう場も減ってしまいました。今回の特集では、水族館で唯一の「ふれあい」のできるタッチタンク水槽を取り上げました。コロナ禍の経験を踏まえて、緩和後はどのように解説をしていくのか?ただ元の通りに戻すことが目的ではありません。コロナ禍で考えさせられた「ふれあい」について、時代の変化に合わせて試行錯誤している姿を感じていただければ幸いです。(小倉)

表紙写真

【タッチタンク】

ボランティアの説明を聞きながら手の上でヒトデを観察。

ニュースレター さかなかな Vol.118 2023年夏
発行/公益財団法人名古屋みなと振興財団 名古屋港水族館
〒455-0033 名古屋港区港町1番3号 TEL.052-654-7080
URL <https://nagoyaaqua.jp>
本誌の掲載記事、写真等の無断複写・複製転載を禁じます。

WEBサイト
<https://nagoyaaqua.jp>
(なお、一部の機種でご覧いただけない場合があります)



さかなかな

2023 夏

Vol.118

特集

ヒトとヒトデの微妙な距離感
～タッチタンク再考～

- 水族館トピックス
- 水族館アカデミー ダーウィンの箱
- わたしのスケッチブック
- ボランティア便り
私の館内おすすめポイント
- 水族館スクールレポート
- アクアリウム・ダイアリー



名古屋港水族館



30年前の開館当時からあるタッチタンク。生き物に触った記憶をお持ちの方も多いのではないのでしょうか。

ヒトとヒトデの 微妙な距離感 ～タッチタンク再考～

学習交流課 勝見乃里江

タッチタンクとは

名古屋港水族館の南館出口手前、順路の最後の水槽がタッチタンクです。水槽にいるのはヒトデ、ナマコ、ウニ、ヤドカリの仲間といった、愛知県の磯にいる身近な生き物です。タッチという名前の通り、ここでは生き物に触って観察できます(以降「ふれあい」と表現します)。キモチワルイ！なんて思わないでください。まれに悲鳴(?)が聞こえることもありますが、多くの人の笑顔と、へえ～と感心する声で賑わう水槽なのです。



ふれあいでは研修を受けたボランティアが観察のお手伝いをします。※令和5年4月現在、ふれあいは不定期開催となっており、普段は見て楽しむ水槽になっています。

ふれあって、感じてみよう

タッチタンクでは、どのようにふれあいが行われているでしょうか。文章で再現してみます。

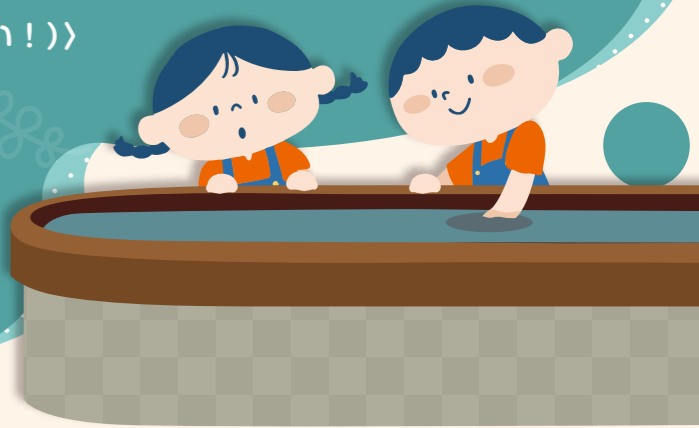
〈ここにヒトデがいますね。水槽のへりのところですよ。これ、ヒトデが自分でくっついているんですよ。…どうやって？ よおく見てください。(何やらもぞもぞした部分が。) 小さな吸盤をたくさん持っています。それを次々と動かして…ヒトデが歩いているのがわかりますか？ 手に乗せると動きがよくわかりますよ。(掌の凹凸に体をなじませ、じわじわと進むヒトデ…これを読んでいる皆様にも実際に体験していただきたい！)〉

かわいくない(そもそも顔と呼べる部分がない)、触り心地も良くない(けっこう硬くて物質的)、地味な動きしかできないヒトデたちも、確かに生きて動いているのです。

生き物の存在を触って感じることができる、そんな機会を子どもだけではなく全ての世代に提供しているのがタッチタンクです。



ヒトデの裏側から出る多数の吸盤。1つ1つを動かして、付着や移動に使用します。これは「管足」という器官で、ウニやナマコも同じつくりを持っています。



新型コロナをきっかけに

新型コロナウイルスの影響で、タッチタンクでは一時ふれあいを中止していました。その間も生き物をこれまで同様に飼育し続けていたところ、以前に比べて状態が良く保たれていることに気づきました。

改めて考えてみれば、タッチタンクの生き物たちは、もともと人間に触られることを好みません。ヒトデの場合は強く握られたり、爪でこすられたりすると、その部分が傷つきます。やがて全身が弱り、死ぬものもあります。

生き物が減ると、私達飼育係は自然の海から採ってきて補充をします。ふれあいを休止すると、補充の頻度も数も大幅に減りました。ふれあいは生き物に負担をかけているだろうと漠然と認識してはいましたが、ふれあい中止をきっかけに、実情をはっきりと思い知らされたのです。



生物採集は漁協の許可を受けて行います。近年は愛知県内のほか、福井県の海岸に行くこともあります。令和4年度は年間約120匹のイトマキヒトデを補充しました。

何のためにふれあうのか

現在、世界中の動物園・水族館は動物の福祉を重要な課題としています。その流れで「動物とのふれあい」についても、様々な点で見直しが行われています。ふれあい体験は人間側にもたらす良い効果がある一方、動物に与える影響も考慮しなければならないとする考え方です。

タッチタンクにおいても、ふれあう時間は長いか、短いか。お客様に一定の体験が提供できているか。生き物の体や動きにどのような影響を与えたか。一つずつ確かめながら、私たちはより良い方法を模索していくことになります。

そして何のためにふれあうのか、という根本的な問いに向き合っていくことは、私たちにとっても、そして生き物たちにとっても、重要なことであることは間違いありません。



世界動物園水族館協会による「動物と来園・来館者のふれあいガイドライン」。動物とのふれあい(interactions)に際しての提言がまとめられています。

アカウミガメの産卵がありました

2023年4月16日未明、南館3階ウミガメ回遊水槽につながった人工砂浜においてアカウミガメが今期初産卵を行いました。産卵を行った母ガメは個体番号『CcW-19』というアカウミガメ。この個体は1992年に野生のアカウミガメが表浜海岸（愛知県豊橋市）にて産卵した卵を保護し、名古屋港水族館にて人工ふ化させた個体です。つまり、1992年生まれで今年31歳になります。『CcW-19』は12歳の時に初めての産卵を行って以降、順調に繁殖を重ね今回の産卵は7年ぶり通算11シーズン目の産卵となりました。

絶滅の危機に瀕したアカウミガメの将来に向けた個体数を推定するには、何歳で性成熟するのか？何歳まで繁殖能力があるのか？そしてその寿命は？などの情報が役に立ちますが、まだよくわかっていないのが現状です。その点において年齢のわかっている『CcW-19』の繁殖は貴重なデータとなるに違いありません。アカウミガメの保護に役立つ基礎研究としてこれからも『CcW-19』を見守り続けたいと思います。



産み落とされた卵は翌日に掘り出し、孵卵温度が管理できるカメ類繁殖研究施設の人工ふ化場に埋め戻しました。

■ 飼育展示第一課 森 昌範

イルカの紹介動画を作成しました

最近“推し活”がブームですが、当館でも14頭のバンドウイルカと2頭のカマイルカの中から推しイルカを見つけて応援してもらおうとイルカの紹介動画を作成しました。イルカたちは一見、見分けにくそうですが外見も中身もかなり個性があります。特徴をとらえると見分けやすくなり、愛着が湧きより一層推し甲斐があると思います。

このイルカの紹介動画は、飼育係から推したいポイントを聞き取り、その様子をまとめた動画です。イルカたちの愛くるしさ、カッコよさ、身体能力などの魅力を存分に伝えるために撮影、動画編集を担当した私のこだわりを詰め込んでいます。例えばスローモーションのタイミングだったり、実際にイルカから水をかけられているところを撮影し臨場感を出してみたり見ごたえのある動画になっています。

この動画は、メインプールの大型画面（パフォーマンスの前後）や、北館2Fのイルカプール横のモニターでご覧いただけます。来館された際はぜひ見ていただき、自分の推しイルカを見つけて応援してみてください。



体を張ってイルカの水かけを撮影する飼育係（筆者）

■ 飼育展示第二課 横田 匠他

水族館トピックス 2023 夏

季節展示「令和5年6月1日よりアメリカザリガニ、アカミミガメの規制が始まります。」

本年6月1日からアメリカザリガニ、アカミミガメに対する「条件付特定外来生物」としての規制が開始されました。4月29日から6月25日まで規制内容について紹介し、併せてアメリカザリガニを展示しました。

両種は私たちにとって最も身近な水辺の生き物のひとつですが、それだけ全国各地に広く定着している外来種でもあり、彼らが及ぼす自然への悪影響について、長年指摘されてきました。そのため今回の規制によって、野外への放出、販売・購入は基本的に禁止されました。ただし、飼育、野外からの捕獲、飼えなくなった場合の里親への譲渡は今後も可能です。

本展示で改めてアメリカザリガニを観察する機会を得たのですが、なるほど、鎧のような赤い甲らに大きなハサミを持つその姿が、子供たちを惹きつけるというも頷けます。本種やアカミミガメに興味を持ち、今後の飼育を考えている方は、終生大事に飼ってあげられるか良く考えてから飼育を開始してほしいと思います。



水槽の左右には、環境省の啓発ポスターも掲示させていただきました。今回の規制内容の詳細についてお知りになりたい方は、環境省のホームページをご覧ください。

■ 飼育展示第一課 藤原 理人

ヤエヤマヒルギの種子がたくさん育っています

南館三階のマングローブ水槽は2014年にできた水槽で、当時より水槽内で成長し続けているヒルギ類が青々と茂っています。この水槽では2021年9月に初めてヤエヤマヒルギの花が咲きました。この時はまだ咲いている花が少なく、花が咲いたのを見つけては人工的に授粉を行っていました。そしてそのうちの一つだけに種子ができました。種子はゆっくりと成長し、花が咲いてから約1年後となる2022年9月に母樹から落下しました。ヒルギ類の種は「胎生種子」といい、樹木についた状態で果実の中の種子が発芽します。20~40cmの長さになると落下して地面に突き刺さり、根や葉を出して成長を続けます。2021年には1つの種子しかできなかったヤエヤマヒルギですが、徐々に種子ができ始め2023年5月現在、たくさんのつぼみと種子が育っています。今年はヤエヤマヒルギの横にあるオヒルギもつぼみがふくらんできており、よりにぎやかな姿を見られそうできわくわくしています。



ヤエヤマヒルギの種子と、花が開くのを待つつぼみたち

■ 飼育展示第一課 東山崎 のぞみ



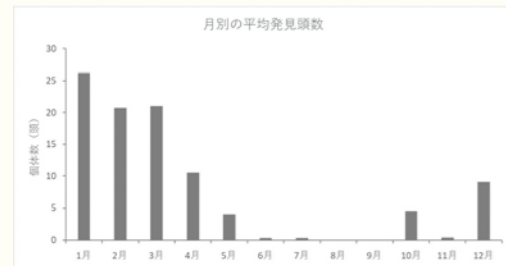
名古屋港のスナメリの生態調査

飼育展示第二課 加古 智哉

スナメリは体長2mに満たない、小さなイルカの仲間です。背びれがなく、体は明るい灰色をしているのが特徴です。名古屋港は製鉄所や発電所を有し、大型の船が行きかう国内最大級の港湾ですが、スナメリが生息しています。

この名古屋港に、スナメリはいつ?どれくらい?何をしに現れるのでしょうか?水族館では大学などと協力して様々な調査を行っていますが、今回は船に乗ってスナメリを探す目視調査についてご紹介します。

目視調査は2018年12月から2023年4月まで、毎月1~2回、計84回調査を実施しており、現在も継続中です。速度12~14ノットで航行する船から、肉眼と双眼鏡でスナメリを探します。ルートは名古屋港水族館の横を出発し、名古屋港の出入り口の東端にあたる知多堤突端と、西端にあたる鍋田堤突端を通り帰港するように設定しました。



【図1】 スナメリの月別の平均発見頭数

2020年度までの月別の平均発見頭数の結果を図1に示しました。毎年冬になるとスナメリが発見され始め、春になると段々と発見数が減ってくるのがわかります。6~9月にはほとんどスナメリは発見されませんでした。

同期間の港内での発見場所を図2に示しました。スナメリは名古屋港内で満遍なく発見され、いる場所に大きな偏りはないようです。大きな丸の場所では10頭以上のスナメリが、カモメやカワウと一緒に集まって魚を追っている様子が観察されました。スナメリは基本的に1~2頭で生活する動物ですが、採餌のときは大きな集団を作ることが知られています。冬の名古屋港ではこの餌の魚を食べる大集団が度々できています。

水族館では現在、東海大学、京都大学、名古屋ECO動物海洋専門学校と協力して、「名古屋港スナメリプロジェクト」を立ち上げ、様々な調査を行っています。今後も継続して調査を行い、スナメリの生態を更に解明していきます。

(スナメリの調査は京都大学野生動物研究センターの共同利用・共同研究、日本動物園水族館協会野生動物保護募金の助成を受けて実施しています。)



【図2】 名古屋港内のスナメリの発見位置図—黒い丸が発見した位置を示しています。黒い線は調査ルートです。毎回できるだけ同じルートを通りますが、海況や他の船との兼ね合いで別のルートを通ることもあります。

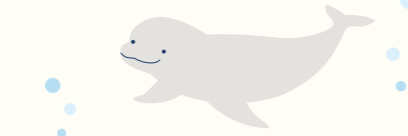


スナメリの目視調査の様子



工場と鳥とスナメリ

手前に2頭のスナメリが写っています(矢印)。スナメリの奥にはカワウやカモメなどが見られます。



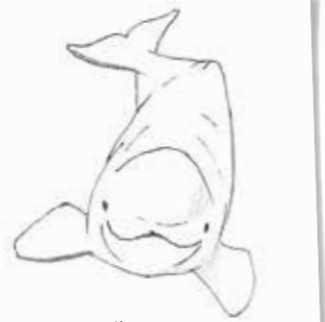
わたしのスケッチブック

ペルーガ

学名 *Delphinapterus leucas*

総務管理課 林 祥代

「水族館」というと思えば浮かべるのがペルーガです。何が幼心に大きく響いたのかは自分でも覚えていませんが、ペルーガのめいぐるみを片手に観覧ガラスの前から離れず帰る時が大変だったというエピソードを母から聞いたことがあります。私がバブルリングを自分で作れるようになりたいと思ったのもペルーガがきっかけだったので、とても印象深いです。



ペルーガという言葉はロシア語の「白い」という単語が由来だそうです

ボランティア便り 私の館内おすすめポイント Volunteer News

南館1階「タッチタンク」

ボランティア 山本 千明

突然ですが、ヒトデ、ウニ、ナマコのうち、自分で歩ける生き物は何でしょう?答えは全部です。そしてその様子を見られるのが、タッチタンクです。

タッチタンク=磯の生き物に触れる水槽ですが、触らずに「じっくり観察してみる」のもこの水槽を楽しむ一つの方法だと思います。

触ると動きを止めてしまうヒトデなどの生き物が元気に動いていたり、岩の穴や隙間などを使い、絶妙に身を隠している生き物がいたり…。きっとそのサバイバル能力に驚きますよ!



タッチタンクの主役といえばヒトデ、ウニ、ナマコ



岩陰に隠れているものも多いのでじっくり探してみてください

水族館スクールレポート School Report

共同研究講演会を実施しました

海洋生物研究センター

3月4日に三重大学大学院生物資源学研究科の宮崎多恵子先生をお迎えして講演会「採る・運ぶ・飼う・研究する 大学と水族館による共同研究のリアル ~巨大アオリイカ「レッドモンスター」の飼育~」を実施しました。この講演会は新型コロナウイルス感染症の制限下の状況での開催となり、105名の参加者は、感染防止のためのマスク着用や300席のシネマ館で十分な距離を取りながら熱心に聴講されました。

宮崎先生は、魚類の視覚生理学や行動生理学、海洋生物環境学がご専門で、アオリイカ、イワシの仲間、ヒラメ、シマアジ、イシダイ、クロマグロ、マンボウ、南極に生息する魚類、ナンキョクオキアミ、ヌートリアなど様々な生物を幅広く研究されておられます。

講演会では、宮崎先生が長年にわたり調査、研究を続けられており、当館の飼育係も参加させていただいた「レッドモンスター」(アカイカ)の産卵・発生や生態について、その目的や方法、結果、水族館との研究の連携などについて楽しいエピソードも交えて紹介いただきました。講演後には活発な質疑応答が交わされ、参加者のアンケートでは、「知らないことが聞けた」、「研究・実験の過程を知ることができた」など大変興味深かった、楽しかったというコメントが多く寄せられました。

水族館では、これからも共同研究を紹介するこのような機会を作ってまいりますので、多くの方の参加をお待ちしております。



参加者の皆さんは広い会場の大画面に見入っていらっしゃいました。(スライドは日本のアオリイカの種類や種別の分布の違いの解説)



宮崎先生もマスクのままお話いただきました。